自主研究活動

江戸循環型社会に学ぶ公園緑地のあり方/99.03./風景の会・吉田敏雄

1.なぜ江戸に学ぶのか
司馬遼太郎は『この国のかたち』の中で「こんにちの私どもを生んだ母体は戦後社会ではなく、ひょっとすると江戸時代ではないか、(中略)それは個性や多様さについて、である。」と述べている。
江戸は100万人がすむ当時世界最大の都市であり、日本の政治経済の中心地、多様な職種、町民文化の発達と活気に満ちた都市であった。それも郊外には緑豊か田園が広がり、ツルが渡り来る環境があった。そして町には上水が完備し、堀がめぐらされた水都、エコロジカルな都市でもあった。さらに地方文化も混在融合させ、物を大切にする暮らしがあった。芝居、川柳、着物文様、浮世絵、園芸文化を生み出すなど、個性と多様性に満ちていた。
こんな江戸をみると、そこには、大量消費・廃棄、一極集中・過密、地方分権・住民参加、少子高齢社会、地域活力・国際化、情報化等々、課題の多い現東京を再考する糸口があるのではないかと思わずにはいられない。260年間の平和、100万人の大都市江戸、そして近代日本の原型を築いた江戸時代に、西洋近代化を越える知恵がまだ隠されているのではないか、という素朴な思いがある。
もっと直接的には、われわれが関っている都市計画的な側面からみれば、その骨格は江戸の構造を引きずっているものも多く、現に都心の公園・庭園の多くが武家屋敷跡地など江戸の遺産を引き継いでいる、その意味でも江戸に立ち返り、新たなる視点を見出し、今後に受け渡す責務あるのではないかと考える。
また、江戸から東京へと大きく政治体制が転換しても、江戸時代の生活規範は庶民の中にその後も残り、特に農村地域にあっては、農業技術も含め江戸期から貯えられた生活様式がかなり引き継がれてきていたように思う。40代後半から上の世代はその体験を多少ともしてきたのではないだろうか。ある意味で江戸の暮らしの残像をみた最後の世代にも思える。この世代は、自らの原体験を省みることにより、そこにあった何かを伝えることができる最後の世代ではないかとの思いもある。
このような大括りの思いから自主研究テーマを「江戸循環型社会に学ぶ公園緑地のあり方」とし、緑の相談所職員を中心に取り組むこととした。事例研究の場として、相談所もあり、花菖蒲、江戸金魚など江戸園芸の面影のある水元公園を選んだ。
発想の概括性、基礎的素養の乏しさから、かなり荒く、偏りのある報告となっていることは、お許し願いたい。

2. 江戸循環型社会とは
本来ならテーマに掲げた「江戸循環型社会」の定義やその現代的評価を行うべきであろうが、ここでは江戸という時代および都市について、環境的視点から、政治、経済、社会、文化等を広く復習し、そのイメージをとらえ、公園緑地への展開の可能性を検討する。

2.1. 鎖国、という状況
将軍を実質的頂点とする封建的支配は、内政的には幕藩体制、年貢、米経済、士農工商等によって維持され、外交面では鎖国という形で外圧を調整し、限られた資源により内部安定化を図ってきた。この封建的支配は、人類の社会的進化にみられる世界的な共通過程であり、日本特異のものではない。
むしろ、西洋の諸国が経済的覇権思想、宗教的布教を背景に世界各地に進出していったことを考えれば、鎖国により自給自足体制、軍縮、徳治主義、多様な町民文化、美しい農村風景を培ったことこそ、日本独自の国家経営であり、再評価すべきではないかと思う。
希なるいのちの惑星・地球、限られた資源の地球、ふるさと地球といった地球環境視点にたった取り組みや、西洋的近代化、世界経済化が広く行きわたり、その限界が危惧される現在、新たな地域主義の復興が求められている。鎖国にみられる経済の外部調整、文化の内実化など、新たな視点で江戸を学ぶ価値はある。
持続可能な社会はインターナショナルな発想とインターローカルな発想の止揚にあり、個々人が地球的思考と地域からの行動を求められる時代になっているといえよう。これを自らの職場において考えるならば、「ビジョンある公園管理」、「地域・場に根ざした公園づくり」ということになる。

2.2.暮らしの中の思想
江戸期の思想的バックボーンは、武士階級においては朱子学であった。修己治人、忠孝、など幕府体制維持の修養学として機能した。一般生活人は連綿とした「家」の繁栄意識、その糧を得る「土地」保有意識が根強く、それらを維持確保するため「勤勉思想」「共同体意識」が培われていたと思われる。社会基盤は稲作を基本とする村落共同体にあったが、稲作以前の狩猟社会、縄文的なもの、森の思想も風習的に融合されながら、地域個有文化として継承されてきた。食材、農作資材など暮らしの必需品を求める形で山、里、海のそれぞれの恵みが緩やかに交流していた。
限られた地域資源で、持続可能な社会の維持（家、村、藩の維持ともいえる）は、経験則的な自然の有効利用、資源の節約・工夫活用により、それも不断の手仕事という営為によりなされてきた。特に江戸という都市にあっては、武士の消費文化による経済的繁栄とともに物を大切にする考えも徹底しており、リサイクル思想が定着し、それを支える多様な職種も生まれていた。
その質素さゆえに文化が沈滞していたわけではない。江戸の文化は、町民の活力に支えられ歌舞伎、狂言、浄瑠璃、俳諧などが開花し、庶民層には義理人情、勧善懲悪、気質、粋、いなせといった価値規範が根づき、侘びやさび、もののあわれなど多様な精神文化も同居していた。武士階級にも「道」という形で生き方が美的に昇華された。武家の暮らしは、町民、庶民の文化にも影響を与え、生活風習の大衆化、各種文化の流派の発生や、文人墨客、洋学者、研究集団、草莽の篤志家の誕生、国民の識字率の高さなど、世界的にみても知的に高い水準が維持されていた。
これらを支えていたのは、藩校、郷学、私塾、寺子屋といった学習施設、社、社中、連、講などの学習サークル、ネットワークであった。
これら江戸期の生活思想、学習基盤には今でも学ぶべき点が多い。節約、循環的な考え方は、言い方を変えれば「あるものは活かす」、「片づけながらながら作り、作りながら片づける」ともいえる。この姿勢は、公園をはじめとする都市行政の計画・整備・管理・運営段階を貫く行政姿勢に行かされるのではないか。さらに、循環型社会が行政目標となっている現在、行政の経営意識、利用者との協働体勢、それを支える地域拠点、多様な学習機会の展開、人材の育成等の参考になると思う。

2.3.農業、植物国家
幕藩体制を長く維持できた背景の一つとして、米を中心とする租税支配体制、経済独自の特産品による藩経済の活性化等があげられるのではないだろうか。これらを支えていた稲作や地場産業は、自然のサイクルに合わせた生産物であり、風土から生み出された産業開発だった。都市と農村との交流もゆるやかであり、急激な改変は起こりにくかったといえる。
農業や地場産業は藩経済にとって重要であり、これらを支える技術書が普及し、限られた土地資源の活用ため、自給自足、輪圃、二毛作、特産品の開発など、農業、政治の陰の指南書となった。これにより農業は開発主義から精農の時代へと移っていった。技術書の中には農作物の栽培方法のほか、土地の潜在性の活用、環境との順応、地場資源の活用等、さらには為政者の姿勢まで記されているものもあり、当時の篤農家、古老の自立心、知恵の集大成といえるものだっだ。そして後の工業化、資本階級を生み出すことにもなる技術書だった。
また、暮らしに必要な品物も植物素材が中心であった。木材、竹、藁、米、まめ類、綿、藍、菜種、薬草類など、建築、食品、衣料、照明、医療等の生活に関るあらゆるものに植物素材が用いられ、自然に帰る形で最後まで使いこなされた。
これらが維持されたのは、資源、技術がかぎられたという事情があるとはいえ、それ以上に「草木国土すべてにいのちがあり、それを粗末してはならない」という考えや「手仕事によって作られたもので、作ってくれた人への感謝」の思いが強く根づいていたのではないだろうか。
現在の行政への反映としては、地域経済の見直し、自然循環できる製品の開発、生産者リサイクル責任義務、企業者の意識改革、消費文化の見直し等にむけての制度化、啓蒙活動が考えられる。われわれ公園を管理する者にもここから学ぶべき点は多い。土地の潜在性の活用、環境との順応、地場資源の活用等を踏まえた「一律管理から公園の状況に応じたゆったり管理」といった新たな目標がみえる。そして施設の重層的利用、資源循環型管理、利用ピークの平準化策など多くの課題解決の指針になるのではないかと思う。

2.4.自治制度
江戸時代の地域社会構造は、領主・村・農民には、土地の所有・保有関係と年貢の徴収・納税関係を骨格に形成されていた。特に年貢の納め方は村単位での連帯責任体制がとられていた。このため米を収穫にするにあたり、稲作は個人の営為とともに村の協働作業の色合いも濃かった。田植えや刈り取りなど集中的に多量の労力がいるときの協働作業や肥料などを確保するための入会地の管理、水田の水管理などから村落共同体自治意識、制度が発達していた。封建的な中での自治意識とはいえ、寄り合いという形でコミュニケーションは保たれ、状況によっては為政者には対抗しうる意識をも醸成していた。
都市部の町民層においても、大家を中心にした共同体があった。防災のための消防組織も充

実していた。江戸の行政は、50、60万人の人口に対し町奉行は350人と非常に少数で運営されていたという。この背景にはこれらの民間自治体制の補完があったからである。
近代化、都市化が推し進められる中でこの共同体の崩壊と新たなコミュニティの形成が叫ばれて久しい。経済的成長も落ち着き、成熟社会に向け、まちづくり、環境視点にたった新たな公意識に基づく都民との交流、協働作業が必要になってきている。
公園行政にあっても、整備・管理思想の見直しが求められ、計画整備段階での制度としての住民参加ともに、管理・運営段階での利用者との協働作業による開放育成型管理を充実させ、行政参加意識の醸成を図りたい。
緑の相談所は、公園のビジターセンター的機能とともに、広域的にまちのみどりを考え、普及できるまちづくりの前線基地、遊撃隊的な存在にもなりうる可能性をもっている。この立場を活用し、みどりに関心ある人の受け皿となり、広範な地域自治意識を醸成したい。

2.5. 江戸の町割、防災
江戸の町は武家地、寺社地、町地でなり、6割以上が武家屋敷であった。軍事的目的を優先したゾーニング、街道整備、堀構成であった。とともに火災に対し火除け地を設けるなどオープンスペース的発想もあった。そしてその町並みは世界一美しかったという。
幕末に江戸来たイギリス植物学者フォーチュンは、「緑の美しさにおいては世界中のどの都市も江戸におよばない」と驚嘆したといい、武家屋敷の庭を中心とした庭園都市で、広重の江戸名所百景に沢山の鳥や植物が描かれているように、たくさんの生物と人がともに棲む町であり、それは武家屋敷の緑、町の水路、郊外の自然によって支えられていた。 町のゾーニングと個別空間の統制による景観美もあった。
町民、庶民の町々は面積的には江戸の2割に過ぎなかったが、生き生きとしていた。
日本橋は商人の町で魚市場が設けられていた。神田は職人町で、鍛冶、紺屋、材木、旅篭が発達し、仲間意識も強く、職人気質や江戸っ子意識が根づいていた。上野は色気、食い気の町であった。郊外の浅草、吉原は、芝居待ち、遊び場としてにぎわった。深川も埋め立て地の遊び場で、辰巳芸者が有名であった。木場は貯木場で、本所、両国橋あたりには、材木問屋があった。花見の名所は、亀戸の梅屋敷、向島・墨田堤の桜、百花園、堀切菖蒲園、品川の御殿山の桜など。芝・高輪、芝浦の江戸前の魚も江戸名物であった。
隅田川は桜、納涼、紅葉、雪見と四季に渡り、江戸庶民に親しまれた。
この江戸の町割が明治以降の都市計画の原型をなし、現在まで引き継いでいるものも多い。骨格道路の継承、武家屋敷の公共施設・文教施設化、オープンスペース化等。
しかしその後、過度の都市化にともないゾーニングは乱れ、防災面でも住民自治、防災意識が脆弱になってきた。制度・ハードの見直し、再構築も大切だが、江戸の都市行政、特に大火の後の処置にみられたような明確なビジョンの提示や身軽な生活スタイルの定着も大切ではないだろうか。
公園行政では、「暮らしに根づいた公園」、「地域に愛される公園」づくりを心がけたい。平常時と非常時とも活躍できる地域の人材を育成することにより、憩いの場であり、かつ避難広場である公園の支援態勢を整えることが大切である。そのため地域住民との交流を大切にし、各種ボランティアのリンケージを行う企画も必要と思う。

2.6. 交通
江戸は、現代に受け継がれる5街道の陸路ともに下町を中心に水路網が発達していた。これにより人の往来と物資の運搬が分離されていた。陸路の荷物の運搬は牛車、大八車、天秤棒にかぎられ、軍事上理由から馬車の使用制限もあったことから、物資の多くは水路を用い、舟運が発達していた。舟を用い、地方と江戸とは盛んに交流し、地方には小江戸が生まれ、地方の特産品が江戸の大消費を支えた。
江戸が江の門という意であり、江戸湊には河岸が生まれ、千石舟、高瀬舟、伝馬舟、猪木舟、屋形船など、目的に応じた多様な舟が行き来する水の都であった。水陸をうまく使い分け、安全で静かな交通網が発達していた。

このような交通手段は、現在でも見直され、水上バスの復活、屋形船の盛況などにみることができる。災害時の交通手段として河川利用の検討も進められている。
公園への応用としては、水面をかかえた大規模公園である水元公園における公園内の移動系の見直しに役立つ。水元公園は小合溜という大きな水面を挟んで対岸に埼玉県の三郷公園をもつ大きな公園である。対岸公園とのリンク、水面からの遊覧などの目的で、小合溜の舟運、渡し舟を週末サービス運行させることも考えられる。また、放置自転車をリサクル利用しての貸自転車サービスなども、環境を配慮した江戸的発想ではないかと思う。

2.7. 産業・物流
士農工商という身分制度はあったが、江戸の町は商人文化であり、経済事情は武士より上の場合もあった。農の暮らしは最下級であった。

商業を支える物流拠点は河岸であり、全国から物資が運ばれてきた。河岸は70近くあり、魚、米、塩、竹など商品名の河岸や、行徳、木更津など地名をつけた河岸があった。
藩も財政を支えるため特産品の開発を奨励し、江戸に送り込んだ。この特産品の発達にともない全国に分業職人社会が築かれ、日本近代化の礎となった。
当時の大坂市場の取引き順位をみると、米、材木、和紙の順であった。これをみても農産物が物流の主体であり、米作については、宮崎安貞の「農業全書」のような農業技術書が全国に普及し、精農につとめていたが、その後、米から藩ごとに特産品の奨励開発の時代に移っていった。そして、特産物の生産から富農層が生まれ、近代工業の礎となった。
余作の奨励は、大蔵永常「公益国産考」などの技術書に支えられていた。品目としては、紙、楮、杉桧櫨、油菜、紅花、砂糖、木綿、桑、漆、茶、麻、煙草、蜜柑、火器、梨、桐、養蚕、絹織り、藍などがあり、工芸作物が藩の特産につながった。櫨、漆の実から蝋燭、油菜など照明革命となる作物も含まれていた。技術書は、農民が富んで初めて国が富む、ゆえに領主は細かなことを指示するのではなく、環境を整備したり、肥料を安く提供、販路の確保することが役割であるなど、為政者の姿勢にふれたり、全国各地の観察と経験的直感から、土地の有機物、ミネラルなどの地味を分析し、山河、地勢から地力をみるなど、総合的な環境把握の姿勢をもつものであった。
小便、人糞、すす、干す鰯、油粕、ぬかなどの有機肥料をすすめ、その施し方も寝せて、発酵させ、薄めて使うなど、菌叢、土壌微生物の活動を促す知恵であった。農具鍬、鎌、千歯扱など農具の紹介、ウンカに対する植物油を使った農薬使用にも言及し、環境洞察と技術革新とがうまくバランスしていた書であった。
為政者の姿勢、農民の勤勉性、技術の普及、これらが一体化し、村落共同体が維持されていたものと思われる。明治初頭、英国婦人イザベラ・バードが、東北米沢を旅した時、この地を「鋤でたがやしたというより、鉛筆で描いたように美しい。米、綿、トウモロコシ、煙草、麻、藍、大豆、茄子、胡桃、水瓜、キュウリ、柿、あんず、ざくろを豊富に栽培している。実り豊に微笑する大地であり、桃源郷である。…美しさ、勤勉さ、安楽さに満ちた魅惑的な地域である」と記している。このような景観は江戸期には、全国にあったはずで、藩と農民とが協働した地域に根ざした郷土景観であった。
江戸周辺では近郊農業も発達し、市が各地で開かれていた。
日本橋から5キロ郊外では米から野菜栽培に重点がおかれ、葛西の草花栽培、巣鴨の菊、堀切のハナショウブ、大久保のツツジなど都市型の花卉園芸も発達した。神田、駒込、茅場町、青山久保町に市が開かれ、生産者、問屋、仲買人、小売り消費者といった商業経済が芽生えた。問屋の独占に対し農民の抵抗から産直方式も生まれるなど、農民の自立心も促した。これらから地場産業も成長した。
また、江戸市中でも武家の消費文化に支えられた大商いとともに、町民、庶民の間では、物を大切にする暮らし方を支えた隙間商いがあり、多種の行商人や職種職人群が生まれた。
江戸経済の特徴的なものとして藩が育成した特産品の地場産業、暮らしに定着した各種市がある。これらは、地域性ある経済として公園管理にも応用できるのではないか。
水元緑の相談所で現在行っている「花の市」は、花を通しての人々との交流、募金活動、賑わいを期待してのものだが、今後は花菖蒲の交配交配、オリジナル製品などによる水元ブランド、特産品の開発も相談所の役割を広げることも可能だと思う。また、そこで得た募金を運用する「花の市基金」を設け、ボランティア活動への謝意としてのボランティアチップの発行、民間企業との提携、グラウンドワーク活動資金等、独自の疑似経済活動を行うことも可能ではないかと思われる。
これらの活動から、経営的感覚、手触りの経済、人・もの・情報のヒューマンスケール感などを体験でき、過剰な消費経済、市場経済を見直す契機になるのではないかと考える。

2.8.水道・用水
江戸時代は上水、用水の整備による都市・農村の開発が成功した時代だった。地形構造を活かした都市形成であった。武蔵野台地の上水の開発、崖線の湧水の活用、低湿地の大胆でゆるやかな治水等、近代の土木工事的発想とは異なった、自然調和型の開発であった。 とともに、これらの施設は町民、農民の協力があって維持されてきた。井戸の掃除、用水の川ざらえなど、共同作業した。それも年中行事や地域行事と連動させながら維持されてきた。 江戸では水が上から下まで有効に使われた。
庭園でも水利用は工夫されたものだった。臨海部での汐入の池、崖線の湧水を利用した池など自然の流れが大名庭園にいかされていた。
現在でも河川や港湾で見られる浚渫工事や内陸運河での潮の干満を利用した水質浄化発想もこの流れを汲む取り組みであろう。
このような水管理の考えは公園管理にも活かすことができよう。たとえば水元公園小合溜にあっては、葛飾区の水循環浄化施設が数年前から稼動しだした。この大循環は、今後徐々に成果あげるものと期待される。しかし水循環だけでは、外部から流入した汚泥は堆積する。ゆるやかな循環では停滞する水域もうまれる。土砂の除去や植物の更新、細やかな流れの促し、水位

変動等、水環境に変化を与えるなかで、浄化能力を高めることも必要ではないだろうか。

2.9.情報
和紙の普及にともない瓦版、浮世絵、草紙本など大衆化した。為政者の制限の厳しい中、川柳、狂歌など婉曲した表現、遊び心もつ表現が広がり、勧善懲悪的な物語が支持された。ミニコミ的伝達や連や講などの学習サークルの全国ネットも伝達していた。
現在のようにマスコミの発達、豊富な情報網・量の時代にあっても、相手の心にいかに残るように伝えるかが大切なことはいうまでもない。さらに、都民サービス要素の強い緑の相談所にあっては、利用者との相互交流が求められる。また、情報にはお知らせからメッセージ、対話、作品展示等、多様な形態をとる。相手の事情も異なる。こうなると発信者が目的を絞り込むしかない。
広く浅く情報を流すより、公園まで足を運んでくれた人が得をする情報を流すことに重点をおいてみたい。これには園内にある掲示板を活用し、情報の公開と限定情報効果をもたせることが考えられる。
マスコミ、時代流行のものに臆せず挑戦し、ミニコミに埋没せず、情報に流されないというスタンスを維持する。これにはインターネットによる情報、メッセージの発信、交換を行うのも時代ニーズに適応するものと考える。
さらに、文字や言葉によらない思いの表現を吸収する場も不可欠である。これには、コンクールの開催、作品展示等による参加を促したい。
これらを意識的に実践することにより、既往の伝達手段を遊び心も交えた気持ちで使いこなすのが江戸的発想のように思う。

2.10.暦・時刻、スケール
江戸時代は月の動きと太陽の動きを基本とした太陰太陽暦であり、農耕と結びついた年中行事、自然のリズムが暦にはあった。
当時の年中行事や風物詩として次のようなものがある。春の七草、梅見、雛祭り、桜、花見、潮干狩り。４月から夏に入り、衣更え、ボタン、藤、杜若、時鳥、端午の節句、隅田川の川開き、蛍売り氷献上、夏祭、夏越しの祓え。７月から秋、七夕、井戸がえ、虫干し、盂蘭盆、月見、萩、雁、彼岸。９月は衣更え、菊の節句、秋祭り。１０月に冬に入り、紅葉、１１月は酉の市、七五三、１２月にはすす払い、羽子板市、節分、大晦日で1年が終わる。
時刻は日の出・日の入りを区切りとし、時刻分割された。陽の光が生活を仕切っていた。自然の光を頼りにした暮らしであった。
また、寸法については人間の体を基本にしていた。一尺が前腕の長さ、六尺が一間で人の丈程であり、建築や建具の基本単位であった。これにより量産、ユニット化に成功した。
このように江戸時代のものさしは、自然のリズム、ヒューマンスケールであった。
エネルギー革命、技術革新により、食べ物に季節感や地域性を体感する機会が少なくなってきた現代。人間が自然の恵みによって生きていることさえ忘れてしまいそうなほど、われわれは非自然、疑似自然環境の中に暮らしている。また自然とは違ったタイムスケジュールに管理されている。これを江戸時代のような自然のリズム、ヒューマンスケールに戻すことは決して時代逆行ではない。むしろ近代が取り残したものであり、近代を超える形であらゆる技術がここに収斂されようとしている。
公園は植物という自然素材を基本になりたっている。この中で季節や農耕と結びついた行事をイベントとして導入することは、地域や家庭で失われたこの自然のリズムを感じ取るいい機会といえる。ただ、形式化された行事の導入ではなく、本来の意味や時季を踏まえ、公園管理作業などの実体験に裏付けられたものでありたい。
例えば七夕行事をみても、現在の暦でいけば梅雨の最中に行う行事となり、天空のロマンが感じ取れる夜空ではなく、短冊に托した願いも雨に濡れてはわびしい。また、七夕は棚機に由来し、機織りの行事、養蚕・農耕と結びついた行事でもあった。蚕から繭をとる生物季節からしても旧暦のほうがふさわしい。さらに江戸期には七夕の季節に井戸をきれいにする風習があった。七夕飾りをきれいな井戸の水に映すためである。この風習も夏の水を清めるという暮らしの知恵からきたものかもしれない。この七夕の例からみても先人のロマン、知恵の凝縮があるように思う。形式より精神を学び、引き継ぐべきであろう。
定点観察、花の見頃、歳時記など公園には季節情報がいっぱいである。緑の情報センター、緑の相談所には過去にあった植物文化の創造的継承の役割があるのではないだろうか。

2.11. 風致、行楽
江戸郊外は将軍の鷹狩の場であり、鳥や生き物は勝手にとることはできず、よく保護されていたという。また武家屋敷は庭をもち、緑豊かな庭園都市であった。
江戸庶民の娯楽は、歌舞伎、大相撲、祭、両国の花火であったが、名所を訪ねたり、郊外の行楽地に四季の風物を楽しみに出かけていくことも楽しみにしていたようだ。サクラ、ウメ、フジ、ツツジ、ハナショウブ等花の名所も人気があった。ハナショウブは葛飾、堀切が名所であった。市

や縁日もにぎわった。
当時の行楽地は、隅田川、両国、浅草、神田明神、不忍、飛鳥山、亀戸、富岡、御殿山、愛宕山、真間、多摩川、井の頭、小金井などで、現在でも公園や社寺として残り、利用されているところも多い。
園芸文化も発達していた。これは、将軍の花好きに影響され、大名、旗本なども競って珍花、奇木を集め、品種改良をはじめとする新たな園芸技術を発展させた結果である。
また、旗本や商人、文化人などにより園芸植物が投機の対象となり、時代時代のブームを作っていった。ツバキ・寛永（1624～1644）、ツツジ・寛文から元禄（1661～1704）カエデ・享保（1716~1731）、カラタチバナ・寛政（1789～1801）、変化朝顔・文化（1804～1818）おもと、マツバラン・文政（1818～1830）、ハナショウブ、キク・弘化（1844～1847）変化アサガオ、オモト・嘉永（1848～1854）、ハナショウブ・幕末と移り変っていった。これらを支えていたのは、武士、植木屋、豪商、僧侶、医師、農民などからなる同好会、連であり、独自の花会せという品評会が開催され、技術向上の場となった。
文人墨客の支持により向島の野草園が興隆したり、庶民の間には市で買い求めた菊、アサガオやホオズキなどの軒先園芸も定着し、園芸文化は多様化していった。
技術書としては、駒込染井植木職人、伊藤伊兵衛がまとめた「花壇地錦抄」があり、園芸文化に貢献した。
江戸の園芸文化は、見世物の作り菊、植木市など庶民に人気あるものから教養人のたしなみ、自然とのふれあい、花鳥風月を愛でるものまで多様であった。しかしその根底には、不如帰、虫きき、雁、芒、女郎花、雪見、釣り、鯊釣りなどを楽しむ姿が絵に残されているように、自然を味わう、風流人のこころ、粋、通人としての美意識があった。
このようなレクリェーション形態は今も変わっていない。
水元公園でも花菖蒲、桜、水蓮、蒲、紫陽花、蓮、菰、葦、曙杉、榛の木等水元ならではの植物、花を求めて来園がある。植物以外にも鳥を楽しみにする人もある。遊びそのものだったり、単に賑わいに触れたかった人もいるであろう。
目的は雑多だが、公園という緑の器の中でその風致にふれ、いのちの膜鼓動にたゆたうことを願望しているのではなかろうか。水元にはこれと近い体感が味わえる広い草原がある。しかし、最近周辺に高層の建物が増えつつあり、緑と水の別世界の風致が損なわれそうになってきた。風流の場が少なくなる昨今、せめて大規模公園にだけでもこの趣を残したい。そのため、公園を借景にして資産価値を高めた建築物があるように、公園としても風致を乱す建物に対し、開発規制したり、その代償としての緑化協力金を相手からとる制度などできないかと考える。江戸のまちは、将軍という権力によって環境統制されていた。今は環境視点に立ち、公のために個人がある程度統制されてもよいのではと思う。

2.12.暮らし
江戸期の日本は衣食住のあらゆる面で植物に依存し、活用循環させた「植物国家」だった。すべてのものが形を変えながら、太陽エネルギーによって循環し、植物がまた植物にもどる自然のリサイクルが生活の基本であった。
現在われわれが使っている化石燃料は、太陽エネルギーが何億年もかけて地下に貯えられたものである。この凝縮したエネルギーを短期間に、循環できないほどの量を使っている。また循環できない物質も作っている。地球環境のあらゆる面での危機的状況を回避するには、高度の科学技術とそれを用い、恩恵にあずかる生活者一人一人の感性や意識改革が求められているのではないだろうか。
公園行政にあっては、緑地の保全や創出とともに生活者の意識改革にも関る必要があろう。特に緑の相談所の場合、環境学習施設としての役割も担っているので、その具体化を工夫すべきである。意識改革、感性教育として体験学習は有効な一つの手法である。江戸期の生活は植物を活用、循環させたものだった。そこにある循環の知恵を学ぶ環境学習が考えられる。たとえば当時の主流作物であった米や粟、綿や藍などを用い、その栽培から利用までを講習会で行う。米や粟は、自らの手で耕し、食物から藁の利用までを体験し、最後は自然に還す術を学び、さらに食文化や水文化を考える場とする。綿や藍も同じように、栽培から始め、紡ぎ、染め織る、この手仕事からヒューマンスケールの自然と大きな自然のサイクルを体感する。この体験は、自分の内なる自然を拓き、自然とつきあう知恵、スタイルを身につける糸口になるのではないだろうか。自然との折り合いの付け方を多少とも体得できると思う。今までは自然のしくみを知る講習会が多かったが、今後は、体験し、行動の規範を皆で模索確認する講習会が大切である。水元にはこのようなことができるフィールドがあり、絶好の地といえる。

NEXT